# 2023 年度ＧＴセミナー
# 第 57 回保育環境セミナー
# 子ども主体編③

第３４４号　２０２３年１０月２日発行

## ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社カグヤ　奥山卓矢

## 子ども主体編③

2023 年９月４日～6 日に「第 57 回保育環境セミナー」（子ども主体編）を開催しました。

オフライン参加は約 150 名、オンライン参加は６０施設を超えるお申し込みを頂きました。今回は、藤森代表から「子ども主体」について考え方をお示し頂きました。

本誌含め、４回に分けてお送りする第③弾です。

### 【セミナー開催趣旨】

「見守る保育 藤森メソッド®」の提唱者　藤森平司先生は自身の実践から今の保育形態を構築しました。その実践のポイントは「子ども同士」「異年齢」「子ども主体」「チーム保育」の４つです。

「見守る保育」という言葉はいろいろなところで一人歩きしてしまい、勘違いされることがあります。

そこで提唱者である藤森先生の名前を使用することで、しっかりとした理念とエビデンス、そして４つの重要ポイントを実践することで差別化を図りました。

また実践園は根底が同じであるため、様々な実践が生まれます。
その実践を互いに学び合うことができるのも、メソッド化した
もう一つの理由です。

GT は乳幼児施設同士が繋がることを目的とした組織です。
今後より繋がりが深くなることを願っています。

ギビングツリー代表　藤森平司（新宿せいが子ども園　園長）

# 第 57 回保育環境セミナー　Q&A

## 保育環境研究所ギビングツリー代表　藤森平司氏（新宿せいが子ども園　園長）

**今回、オフラインでセミナーにご参加頂いた皆様から寄せられた質問について、**
**ギビングツリー代表の藤森平司先生に考え方を示して頂きました。**

**―はじめに―**

今回はこんな質問はないかもしれないが、先週末ある園で、午後の Q&A の質問の中で、「ウクライナとソビエトをどう考えますか？」と聞かれて、それは、子どもたちに聞かれた時にどう答えますか？という質問ではあり、保育に関係するが、それを私がどう答えるのかを聞いていた。そういう質問があった。私が答えたのは、どっちが正しいかは私は判断できないし、なかなか分からないけど、正しかろうが、正しくなかろうが、人を傷つけることを許してはいけないと思います。どっちが正しいかは、お互いの話なので分かりませんが、少なくても、子どもたちが人を傷つけることはよくないね、という話でいいのではないかと話をした。困ったのは、韓国へ行ったときに、韓国の子どもに「竹島はどっちの領土だと思いますか？」と聞かれ、どう答えたらいいのかと思った。行ったメンバーが答えたのが、「私たちはまだ、いい答えが見つかりません。皆さんが大人になった時に、いい答えを見つけてください」としか言えなかった。Q&A は、そういう意味ではなかなか難しいが、一緒に考えていきたいと思います。

**【質問①】**

**園でも、子どもが自分で選択して、選択したことによって責任を持って行動できるように活動での選択制を大切にしているのですが、どうしても、選択したあとに「やだ、やりたくない」で活動に参加しない子が特定でいます。そういう子への声の掛け方、他の子から選んだからには頑張っているのに、、とならないようにするにはどうしたらいいですか？**

一つは、やらないということを拒否ではなくて、やらないという選択にする。やらないで他に何をしたいか。先ほど 1 歳児に大きい方にするか、小さい方にするかで、首を振り、3 つ目の選択でお茶だけでいいという選択をした。保育室にゾーンがあるのは、子どもはどこかで過ごすが、どれでも過ごしたくないと拒否して走り廻る子ではなくて、やりたくないことをやれる場所を作ってあげること。うちではピーステーブルをそういう場所にしています。ボーっとしていてもいい。例えば、部屋にクッションを置いて、ゴロゴロしていい。子どももそういったときがある。何もしたくない日もあるので、出来る場所を用意する。もう一つ別にやりたいことがある場合。こちらが用意していないことで、他にやりたくない場合、聞いてあげて、どうやったら実現できるかを一緒に考える。例えば、その時間帯で、別の場所でできたらそれをしてあげたらいい。うちの場合はゾーンで言うと、フレキシブルゾーンと言って、こちらが用意したゾーンではなくて、子どもたちがやりたいことを実現できるゾーン。もしそういうことがなければ、いつやるかを考えてあげる。ダメだではなく、どうしたら実現できるかを考える。物がなければ、今度用意するねとか、今度つくろうとか、やりたくない時に何がしたいのか。何もしたくなくて、ボーっとしたいかで、やりたくない理由を探り、実現してあげることだと思います。もう一つは、その子が発達障がいのようなことがあれば、やりたいことをやることに意味があるので、ちょっと違う。偏りがあることなので通常よりこだわりが強いので、その時にとらないといけないのは、やりたいこと、こだわることをさせてあげることが大切と言われています。その分野に関しては、天才かもしれないです。ただしどんな障がいがあろうが、人を傷つけることはトレーニングをさせてでも止めさせないと思います。これは発達障がいはトレーニングするしかない。ソーシャルスキルトレーニングと

言って、社会の中で生きていくためのトレーニングすることが必要ということはあります。しかし危害を加えないでお集まりに来ない、寝っ転がっている。今日は閉じているブロックゾーンで遊んでいるとかは、止める必要はないですね。発達障がいの子がこだわっているのなら、それをやることで落ち着く。気を付けないといけないのは、そうではない子たちが、私も、僕もと言わない子たち、自分が何をしたいかを考えられる子にすることですね。お集まりの時に来ない子で、発達障がいの子が自分を落ち着かせているとしたら、きちんと来ている子が、僕もあそこへ行きたいと言わないようにしないようにしないといけない。その子にとってそれが必要である、君はなくても、来れると羨ましがったりしないことが大事なことです。それは小さいころから、自分のことを分かる子にしていくようなことがあって、やりたくない場合も、色々あるので一つの答えではなく、その子がどういう気持ちでそう言っているのかがあります。その中でもう一つ、わざと逆らうことがあります。それは先生へのサインですね。関わってほしいとか。家で問題があったりしたときに、わざと悪さをしたりすることがあります。よく言われるのが２歳児のイヤイヤ期。この場合は、軽くいなすしかないですね。やりたくない気持ちに共感し、今はこれをする時間だということで、子どもの気持ちもあるので、その辺りを理解して、どういう対応かを考えるといいと思います。

**【質問②】**

**２歳クラスです。給食時、規定量を盛り付けた後にどれくらい食べられるか・苦手なものがある場合は何を減らしたいか…などを一人ひとり聞いて配膳しています。偏食気味でほとんど食べられない子が数人いるのですが、「減らさない」「食べられる！」との返答ですが毎日ほぼ　食べられずに終えています。「今度から減らそうね」「食べられたらおかわりしよう」と声をかけたり、実際に減らした状態で盛り付けたものを見せて、【多い・少ない】が比較できるようにもしていますが必ず多い方を選び、毎日フォークで触れようともせず捨てています。**

**この場合は、まだ理解が難しいと捉えて、初めから食べられる量を盛り付けるのがいいのでしょうか？関わりや、声掛けをアドバイス頂けたら幸いです。**

一つは私の園に見学に来てもらうと分かるが、どのくらいの年齢で量が把握できるか、２歳児に貼ってあることがあります。期ごとにどんぶりを描いた絵に、シールでこっちは多く貼って、少なく貼ってということをして、多い・少ないで貼れるかどうか。長いのと短いので分かるかどうか。私は２歳のころから分かり始めてくると思っている。

きっかけは今月行われる運動会。運動会の種目は子どもが選択をする。当日は年齢別でやるので個人差があります。同じことをさせるのではなくて、個人差に合わせることを子どもに選択をさせる。先生たちに注意していたことがあり、今はそうしていると思うが、ジャンプする力があるときに、高いところと低いところを作るが、その場合、予行練習でどっちから飛び降りる？と先生が聞くが、そうではなくて、高い方から降りる？低い方から降りる？と聞きなさい。平均台では、広い方で渡る？狭い方で渡る？と聞くとか、そこで狭い・広い、高い・低い、短い・長いを把握させるのは、運動会の種目の意味です。それを２歳からしていてシールとかで試して、それが８割くらいの子が出来るようになったら、給食で量を言うようにしている。最初から量を言わすのではなく、把握できなければいけない。一番難しいことだと言われています。思ったよりできるかなと思うが、小学校に務めていたときの一年生の課題なんですね。長いか短いかを決めさせるのは。私たちは簡単にやっているようだが、１年生に教える時は大変で、例えば縄跳びの縄がどっちが長いか、短いかは言う時に、問題は端っこを同じにしないといけない。中途半端では分からないので、端っこにしないといけないのが一つ。２つ目はピンっと伸ばさないと比較できないとか、数の保存と言ってピアジェが一番難しい概念と言ったが、多いか少ないかも例えば黒板に磁石を貼る。それをばらばらに貼る。それから一緒に集めて貼り付けると、どっちが多いかといったときに、子どもはバラバラすることの方が多いというが、

実際は同じ数。これは形によっても形は変わらないのが数の保存だが、これを１年生に理解させるのが大変と言われる。学問的には難しいと言われる。同じように、これはSTEMで実験でやるが、フラスコと円柱のビーカーと同じ水の量を入れて、子どもにどっちが多いかで聞くと、見た感じで選んでしまうことがある。実はいっぱい遊ばないと、体験しないとできない。夏の間はプールに入る子と、入らない子たちはそういう量を測るとかの水遊びとか、体験の中で同じなのだとか、形は変わるけど同じ量という体験も大事です。給食の量と言わせると言っても、色々な要素があるので、子どもが簡単に言えるとは思わないので、先生はよくいろいろなことを言えるかどうかで判断することが大事ですね。中国へ行ったときに中国では、セミバイキングは出来ないですね。質問のように全部多くとってしまう。向こうは残す文化なんですね、最初臥竜塾メンバーで韓国へ行ったときに、宿舎の近くの食べるところで食べていた。いつまでたっても出てくる。最初分からなかったが、もういらないときは残さないといけない。食べ残すと、足りないとなってしまうということが中国もあって、よそってしまう。政府から最近こういう文化は変えるように言われています。給食の時だとわざとらしいが、どれだけ食べれない人は多いか、日本の捨てる量の多さ。コンビニが残ったものや賞味期限切れしそうなものを、子ども食堂に持っていくとかしていますよね。残菜はもったいないだけではなく、資源の無駄だけではなく、それを処理しないといけない費用も大変。何かの時に、そういうようなことも話に入れて、残したものは一体どこへ行くのか。お説教染みると、なんか道徳ぽく好きではないが、探求心として、どういうところへ行ってどうなるか。何かの時にしておくと先生たちの言動、ことば、子どもたちは大人の会話の中から知っていきます。先生たちの会話の中で、残ったものが多いらしいね。食べれないこともいるからね、というと子どもは聞きかじって、親に言うと思います。そうすると子どもは親に注意するんですよ、残しちゃだめだということも含めて。食べている時に日常的に、そういう意識を持った方がいいと思います。量を把握するのは、そういう意味もあるので、最初は難しい。食べられる量をよそえるとは限りません。０１の時に残菜を記録しますよね。そうやって、いつもどれくらい食べれるかを把握しておくことも大事です。この子は本当はどれくらい食べれるか知っておいて、口で言えるようにする。当然、最初は言ってあげないといけないと思いますね。選択させるのは、どっちがどれくらいかではなく、色々なことを生活から学べるようにしていくこと大事だと思います。怒って、どうという話ではないので、工夫をしてみてください。

**【質問③】**

**ドイツの保育に興味を持ちました。私の保育園でも水遊びの時にカップに泥水を入れて飲む子どもがいるのですが、ドイツではそのような子どもに止めるような言葉かけはされてなかったのでしょうか？**

まず、大きな違いは、夏によく行っていたが、プールに入っているのを見たことがありません。日本でも少しずつプールがなくなり始めています。何のためにプールに入るのか。早く泳ぐことが何の意味がその子に持つか。水泳選手になるなら必要ですが、一番関係あるのは、助けが来るまで浮いていることが大事です。ドイツは浮くことを練習します。夏に入るのではなく、小学校やスイミングスクールのプールを借りて、浮く練習をします。ドイツは池や川があるので、助けが来るまで浮いていることを教えます。なので泳ぐことを幼児期には教えません。水遊びはいっぱいします。当然、口に入れる子もいるが、その子たちもそうだが、美味しくて飲むわけではありません。一つは確かめることがあり、ごくごく飲むわけではない。口に入れることはあるが、さりげなく避けることはありますが、あえて飲みませんということもしません。私が見ているときは、ビニールプールを囲んで水遊びをしていることがあったり、泥水に浸かることもあるが、口に入れてしまうことはある。飲むことはないが、そこまで神経質ではない。清潔

感の違いで、トイレに赤ちゃんは這って中まで行きます。おしゃぶりも転がっていますね。びっくりしたのが、普通の水遊びはトイレですることが多いです。ボディーペインティングみたいなのはトイレでやりますね。水場はトイレしかないのでですね。もう一つびっくりしたのが、トイレでお集まりをしている園がありましたね。元々ドイツは水洗トイレということもあって、トイレは汚い場所という概念がないですね。便器の作り方もあって、便器は様式だが日本の水が流れるところがあるが、ドイツは持ち上がって排水の後ろ側にあって、床には一切こぼれない。トイレには小便器はありません。なぜかというと家庭の中にはないからです。小便器でしてしまうと、家庭で入れない。性別が男の子でも座ってします。外にこぼれることはないので、掃除もしやすいので、不清潔という概念がないのかもしれないですね。日本と違うのは、除くことからするのではなくて、本人が防ぐ力をつけることがメインです。段差をなくすことはしません。段差だらけにします。何故なら町の中が段差だらけだから。ドイツは石畳なので、園の中が平らだと歩けないので、園内も凸凹しています。それを自分から防ぐ力をつけることがメインです。イギリスへ行った時もそうですが、各家に暖炉があるが囲いはなく、やけどするようにしています。だから近づくとやけどするからと言ってしない。網で覆ってしまったら、触ってしまいますから。日本は何しろ大人が防ぐことを優先ですね。考え方の違いが随分違いますね。コロナの対応についても随分燃えましたよね。罹らないではなくて、早くかからせて、全員にかからせるという考え方で、本人が地域で家庭で、自立していく力をつけていくのが保育園なので、どんなに小さな子がいる乳児保育園でも、大人の便器に枠を付けるとか、台をつけるとか、家庭と同じようにしています。
なので段差も多いし、石だらけということがあるので、わざと泥水は飲ませないが、地域で触れるくらいにしている。そういう意味で、わざとしている意味ではないので、誤解しないようにして頂きたいです。それを必死に止めるとか、吐き出させる必要はないというくらいだと思います。

**【質問④】**

**オムツを替えることも保育とのことでしたが、そこを保育として保障してあげたい気持ちもあるが、そこに職員が付かなければならないとやはり手が回らないと感じた。その場合は職員はどのような動きをしたら良いかを知りたい。**

私の園では、基本的にはトイレに行く担当が週で決まっています。見学の人が、職員が書いた当番表の中に、今週の運のいい人と書いてあって、何がいいんですか？と聞かれ、トイレを変える人ということで、週に二人なら二人と決めて、いつもトイレにいて、他の先生はトイレに送り出すだけで、トイレのそばにいて変えて、その先生は１週間調乳はしないと決まっているので、先生たちは頃合いを見て送り出していく。トイレの時間は決めていくのではなく、順に送り出すと、そんなに大変ではない。それがローテーションでやるので、そういうようなことですかね。また、気が付いた時に大人が変えてという声が飛び交うので、見学で見ていただけたらわかるが、トイレが済んだ子は、写真を移す。気づいた先生がまだだなとなれば、気づいた先生がトイレへ連れていくことはある。一斉にトイレの時間と決めるのを、１日の中で行くようにすれば、それではないように思います。上手くその園としてのローテーションの仕方を考えるといいと思います。よく、この間もネットに保育士は大変の中で、トイレに行けないと書かれていたが、トイレに行けないのかと思う。私の妻は自宅で小中学校に家で英語を教えていたりはしていたが、いわゆる専業主婦。孫が生まれて世話をしないといけないからと、乳児クラスのボランティアに来ていいかと１日入った。終わっての感想が、保育士は楽ねと言った。えっ！？と言ったら、トイレ行きたいときにお願いと言えば行けるが、家では、一人でトイレ行くことは出来なかった。園はちょっとお願いと行けばいける。遊んでいたら、給食の準備は出来ましたと言ってくれる。家では自分で準備をして、片さないといけない。一緒に食べた後にまた遊べばいいけど、

家では片づけないといけないということで楽だと言ったのは、チームでするとお互いにお願いして出来る事なんですね、家では一人だと本当に大変です。ご飯を食べる時間も、トイレ行くこともできないと言っていた。みんなで、おむつを替える時も、トイレ行く時も工夫して、どの先生がどうしているか、総人数は決まっているので、どうしても足りないときは、朝会が毎日あるが、ヘルプ表があって、そこにこの時間帯ヘルプが必要とクラスが書くと、どこかしらから、ヘルプへ行く。他のクラスの先生が行くとか、散歩へ行く時一人必要ということを書くと、他のクラスがヘルプに行けるように、他のクラスの日案を一人少ないような保育に計画する。全クラスでやりくりをして、このクラスが大変なら、他のクラスは一人少なくてもできる日案を立てるとか、この時間帯、噛みつきが多くなるなら、この時間帯は落ち着いているから、うちのクラスが行きますとかが、チーム保育の考え方です。うちの場合は、園 Line があるので、職員 Line でこのクラス大変なので、どこかヘルプに行けますか？とあると、うちから行きますとある。皆でやりくりをしあうことをします。上手く時間で、日案で調整をする。そういうような感じで工夫をしてみてください。

**【質問⑤】**

**貴重な研修会に参加させていただきありがとうございます。昨日、新宿せいがさんの見学をさせていただく中で、2・3 階を子ども自身で選択して行き来する姿がありました。先生方に質問すると、特に誰がどこにいるか把握しているわけではないとのことでした。大人の目がない場合、階段などもしトラブルがあって落ちたり、怪我をしたりなどの予測もできるかと思うのですが、子どもを信じて見守っている保育観に魅了されました。信じて見守る上で保育者自身が気をつけていることはありますか？**

毎朝朝会で前の日にヒヤリ・ハッとしたこと、ケガしたことを報告し合います。そうすると、そこを気を付けます。うちは再発を防ぐ。ひっかき噛みつきも皆で周知してみんなを見ている。先生の目と言っても、限界があるので、今までヒヤッとしたり、ハッとしたりする部分を見る。階段は危なく思います。子どもも危ないと思うんですね、なので気を付ける。ケガやハッとすることが一番少なく、危ないのは平らなところですね。階段みたいに気を付ける部分はあまりケガが起きないでね。最近、置き去り事件があって、監視員が必要とあるが私の園では、一番の監視委員は子ども同士にしています。散歩行く時に人数確認をして、担任が見て、職員室から出て、第三者が確認します。そして子ども同士で確認します。子どもたちが見つける。事件・事故が起きる時に、他の子はどうしているのだろうと思いますね。常に子どもに声をかけて、子どもたちに大丈夫？と聞きます。階段で何かあっても、子どもが知らせに来る。実際には他の場所よりケガが少ないです。東京のいいところは階段が多いですね。駅にしてもどこにしても。階段は歩きなれていることもあります。保育園は平屋というのが昔原則だった。2 階建ての場合は、公立の場合は 2 階建て保護といって途中でけがをしてはいけないと言って、特別に一人加算になった。ある市から、2 階建てに園を立てることになったが、メリット・デメリットを説明しないが、メリットを教えてもらえますか？と電話が来た。その園の周りは平屋ですか？と聞いたら、２階ですと言った。メリットは、家で 2 階にあがれるようになりますと言った。園で練習しておかないと、家で上がれませんよと話したことがある。そういう意味で、２階の意味と、居場所というのは、これから学校が提言されています。教室だけが学びの場ではなくて、玄関や階段、ホールすべての場所を学びにしましょうというのがある。保育室でここにいて、あっちにいることと、ここにいて２階にいることは同じなんですね。2 階は 2 階の担当がいる。向こうに行けば向こうの担当がいるので、一人の先生が全部を把握するのではなく、来ているところの先生が把握する。その代り、その場所を出てはいけないので、0 のところは鍵が締

まっていますし、エレベーターに乗ってしまうことがあるので、スイッチを切って乗れないようにしています。どこへ行ってもしたかないですね、探索活動もあるので。極端なのがドイツのオープン保育です。園内すべてどこにいても自由という保育です。そうすると保育者から反対が出たそうです。どこにいるか分からない、お迎えの時に困ると反対意見が出て揉めたそうです。結論が出なかったのでもう一度考えましょう、子どもはどうか考えた、そうしたら結果的に、反対理由は大人が監視するためだった、子どもは好きなところへ行けて、好きにできるので、子どもはみんな生き生きするし、子どもにとって、どの場所も必要になり、オープン保育を実現したそうです。どうしても日本の問題は見ていたかどうかがあるが、限界がある。園庭でロープに首が引っ掛かった事件があったが、園庭には 6 人先生がいて何で気付かなかったか、それは先生は子どもと遊んでいたから。ドイツは子どもと遊んではダメ、後ろ側が死角になりますから。うちのゾーンも子どもとトランプをしていたら相手の顔しか見えないので、なるべく遊ばない、全体を見ている。ただし、子どもからすると監視しているように見えるので、離れて日誌を書くとかうちはしています。離れて子ども同士で遊んでいますので、階段も一応は上に行ったなとか、どうしてもだったら Line で、○○君が上に行ったと流す。散歩先ではそうしています。向こうに行っていますとか、それを見るとかしています。園内研修でうちのベテランが子どもの見方の説明をしているときに、先生が大体見ていると。親がそこに来ます。その先生が立ち上がっていくとします。見ていた廻りをカバーするようにスーと動きます。それが阿吽の呼吸で、動いています。当然子どもと遊ばないといけないこともあります。その時に見ているときのひとりが入った方がいいなと思うと、他の先生は入ったなと思うと、全体が動くんですね。これがある意味見事ですね。見学するときにこれが見えるといいなと思うので、同じ T シャツを着てもらった。これが来ていると見事に先生が点在しています。先生が一人抜けると、カバーするように動くことがやり合っているのがチーム保育ですね。階段も問題のある子が言ったら、上の先生に連絡するとか、いつも見張っているということではなくて、ケガの多い確率のところを優先的に見ている。
そういう中では階段は少ないということもあります。

本稿は、2023 年 9 月 5 日に開催した「第 57 回保育環境セミナー」の Q&A の内容をまとめたものです。

（文責/奥山卓矢）